

『ロマンスの予感』

著:遠野春日

ill:高久尚子

「はじめまして。安曇真人です」

目の前の美青年が淡々とした口調で挨拶した。

「イースト総合警備保障の本庄聡です。よろしくお願いします」

正直なところ、聡は真人の持つ独特の雰囲気(け)に気(け)圧(お)されていた。若くして重要な地位に就いているせいかもしれないが、聡の周囲にいる同年輩の男たちとは、あまりにも異質なのだ。

堂々として余裕のある物腰は、優雅さすら感じさせる。

顔立ちが端正なのはあらかじめ写真で知っていたが、実際に生きて動いている真人は、それこそ息を呑むほど綺麗だった。艶のある髪はさらさらして、首を動かすと白い額に落ちかかってくる。それを長い指でときどき掻き上げるのだが、普通なら目障りなその仕草も彼にかかれれば見とれてしまうほどさまになる。

全体的にほっそりとしていて、髪や肌の色が淡いせいか、真人は一見するとおとなしそうな印象の男だった。黙って座っていれば、一度も社会に出て働いた経験のない、世間知らずのご令息ふうに見える。

しかし、きびきびとした口調や、意志の強そうな瞳、そして素晴らしく似合ったビジネススーツがそれを否定する。彼が遣り手で有能な企業人なのは間違いなさそうだ。

聡は真人の外見と内面のアンバランスさに戸惑っていた。

同時に、はっきりとした理由はないのだが、真人が本来の性質以上に気丈そうに振る舞っている気がして、どうにも据わりの悪い気分を味わっていた。

相手が無理をしているように感じると、こちらも構えて緊張してしまう。

「社長もすぐにこちらに参ります」

真人としては、それまでは本題に入る気がなさそうだった。

自分のことのはずなのに、まるで他(ひ)人(と)事(ごと)のような態度だ。真人からは脅迫を受けて焦ったり怯えたりしているようすは微塵も窺えない。普通なら聡もそれを肝が据わっていると評すのだが、どうも真人の場合は、単純にそうとは言い切れない不安定さを感じられる。むしろ虚勢を張っているのではないかと疑いたくなるのだ。

五分ほど気まずい沈黙が続いたあと、社長が慌ただしくやってきた。

やはり、エレベータホールで擦れ違いになった人物だ。

真人とは血の繋がりのある関係のはずだが、あまり似ていない。たぶん真人は母親似なのだろう。彼の顔を女性っぽいラインに変えて想像すると、そのまま無理なく美女になる。真人の母親は彼を産むときに亡くなったそうだ。彼には両親も兄弟もいないのだ。

聡は社長とも挨拶を交わすと、早速ですが、と仕事の話に入る。

話をするのは、もっぱら社長と聡だけで、真人は腕組みして椅子に深く体を預けたまま、ほとんど身(み)動(じろ)ぎの一つもしなかった。長い睫(まつ)毛(げ)の目立つ瞼(まぶた)は閉じられていて、もしかするとうたた寝しているのではと不安になるほどだ。

ちらちらと真人の白皙に視線を流していると、そのうちに隣に座っていた社長も気づき、真人に声をかけた。

「聞いているのか、真人」

その途端に真人はぱっちり目を開き、斜め前にいる聡と真っ向から目を合わせた。茶がかった瞳で見つめられ、聡は魂を吸い込まれそうな心地になる。

「聞いていますよ」

聡は、真人の声を意識するよりも、薄い唇の動きに気を取られていた。ほのかな桜色をした唇の隙間から、白い歯が覗(のぞ)く。どこを取っても非の打ち所がなかった。「警察までは呼ばないかわり、ボディガードの件は納得したはずだ。もう少し身を入れてくれないと困るぞ」

社長が厳しく真人を諫(いさ)める。

すみません、と真人は素直に謝った。本気で反省しているのか口先だけなのかはわからない。どちらかというと後者のように聡には思えた。少なくとも、真人がこの件に対してまるで積極的でないのは確かだ。

ともすれば俺自身が嫌なのか、と聡が気を回しても、無理はないだろう。

「もし担当者に不満があるようでしたら遠慮なくおっしゃってください。かわりのものを呼びますから」

人事に関することは最初に聞いておくに限るので、聡は真人を見据えてはっきりと言った。後からごねられるよりもそのほうがお互いによい。

「それはありません」

真人はいくぶん困惑している。自分の態度をそんな意味に取られて、心外だという感じだ。

「わたしの態度が失礼だったのは謝ります」

「では、私が担当させていただいて問題ありませんね？」

聡が念を押すと、真人は頷きながらも、さらりと一(いつ)矢(し)を報いる。

「人選に不満があるわけではありませんから」

いかにも含みのある返事だ。

このまま聞き流してはしまえないので、聡はさらに突っ込んで聞く。

「ボディガードそのものが不要とお考えですか？」

「まあそうです」

社長が唇を尖(とが)らせて真人に何か言おうとしたが、彼が言葉を継ぐほうが早かった。

「皆、神経質になりすぎている気がします。皆と言っても、今朝のことを知っているのは我々と秘書の鷹野だけですが。これがもしも質(たち)の悪い悪戯(いたづら)だったとしたら、ここでこんなふうに鬨(なぐ)めっ面(めん)を突き合わせているだけでも、仕掛けた人間は満足しているのではないですか」

「そうかもしれませんが、それと同じくらい……いや、私的意見を言わせてもらえれば、それ以上に、悪戯(いたづら)ではなく本気の可能性がありますよ」

「可能性を取り沙汰(さた)してもさして意味はありません」

「そうです」

聡は真人のそっけない態度に少し腹が立ってきたが、ここで熱くなっても仕方がないと抑え込む。逆に自分も冷ややかな物言いに徹した。

「だからこそ、あなたには当面ボディガードが必要です。警察は基本的に事が起きてからしか動かないが、私たちは事が起きるのを未然に防ぐためにいます。何も起きなければそれでいい。それに越したことはないんです。私たちの仕事は、何も起きなくて成功なんですよ」

返す言葉が浮かばなかったのか、真人は口元を引き結び、黙り込む。

そこでようやく、二人の遣り取りを聞いていた社長が、聡に向かって口を開いた。

「とにかくボディガードをお願いします」

この一言で、真人はフッと諦めたような溜息をついた。

身の危険を回避するためにボディガードを付けるというのが、なぜそんなに嫌なのか、聡にはさっぱり理解できない。普通ならば震え上がって、藁(わら)にも縋(すが)る思いで万策を尽くすところではないだろうか。

真人はピンと背筋を伸ばしたまま、それ以降は社長と真人が綿密な相談をするのを、ほとんど無言で聞いていた。ときどき意見を求められても、はい、とか、いいえ、程度の簡単な返事ですませる。顔つきは至って平静で、子供のように拗(す)ねているわけではないのだろうが、なんとなくしっくりこない奇妙な打ち合わせだった。

社長と話し合った結果、まずは一週間ようすを見よう、ということになった。

基本的に真人が社内にいるときには休憩してもらっていい、と言われた。ビルのエントランスには警備員が常駐しているし、内部には大勢の社員がいる。不審人物を見かけたら全社員で声がけするように、今朝の朝礼で通達したとのことだ。

そのかわり、夜は真人の自宅に泊まり込むことになる。

真人は両親の遺した家で一人暮らしをしている。毎日昼間は家政婦が通ってきて、家事と飼い犬の世話をしているそうだが、夜は一人きりだ。社用車が送迎するのに聡も同乗し、そのまま一緒に泊まってほしいと社長が言った。

聡としてはもちろん異存はない。

しかし、それはまたきっと真人がいい顔をしないだろうと心配になり、彼の顔色を窺った。

予想に反して、真人はほとんど無表情のままである。聡と目を合わせても、軽く頷くだけだ。

本当に納得しているのかどうかは怪しかったが、本人が反論しなかったので、この件もあっさり決まった。

本文 p32～37 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>